国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the Comprehension of Humor : A Study of Its Verbal Meanings, Substantial Meanings and Contexts

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-02-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 永野, 賢, NAGANO, Masaru
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001743

ユーモアの理解

——意義・意味・文脈の問題の一考察——

永野　賢

1　問題の設定

夏目漱石の『三四郎』の中に，広田先生・野々宮さん・よし子・美禰子・三四郎の五人で菊人形見物に行った時，美禰子が気分が悪くなったため三四郎とふたりだけ会場を出て野原の小川のほとりで一休みする場面がある。抜粋引用すると

——

所へ知らん人が突然あらはれた。唐辛子の干してある家の影から出て，何時の間にか河を向へ渡ったものと見える。二人の坐ってゐる方へ段々近付て来る。洋服を着て髯を生やして，年輩から云ふと広田先生位な男である。此男が二人の前へ来た時，顔をぐるりと向け直して，正面から三四郎と美禰子を睨め付けた。其眼のうちには明かに憎悪の色がある。三四郎は凝と坐ってゐにくい程な束縛を感じた。男はやがて行過た。其後影を見送りながら，三四郎は，

「広田先生や野々宮さんは嘸後(あと)で僕等を探したでせう」と始めて気が付いた様に云った。美禰子は寧ろ冷かである。

「なに大丈夫よ。大きな迷子(まひご)ですもの」

「迷子だから探したでせう」と三四郎は矢張り前説を主張した。（中略）

「もう気分は宜(よ)くなりましたか。宜くなったら，そろそろ帰りませうか」

美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰を又草の上に卸した。其時三四郎は此女にはとても叶はない様な気が何処かでした。同時に自分の腹を見抜かれたといふ自覚に伴ふ一種の屈辱をかすかに感じた。

「迷子」

女は三四郎を見た儘で此一言を繰返した。三四郎は答へなかった。

「迷子の英訳を知って入らしって」

三四郎は知るとも，知らぬとも云ひ得ぬ程に，此問を予期してゐなかった。

「教へて上げませうか」

「えゝ」

「迷(ストレイシープ)へる子――解って？」（中略）

迷(ストレイシープ)へる子といふ言葉は解(わかつ)た様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも，寧ろ此言葉を使った女の意味である。三四郎はいたづらに女の顔を眺めて黙ってゐた。

それから数日後，三四郎が大学から下宿へ帰ってみると――

下宿へ帰って，湯に入って，好い心持になって上がって見ると，机の上に絵端書がある。小川を描いて草をもぢゃもぢゃ生(はや)して，其縁(ふち)に羊を二匹寝かして，其向ふ側に大きな男が洋杖(ステッキ)を持って立ってゐる所を写したものである。男の顔が甚だ獰猛に出来てゐる。全く西洋の絵にある悪魔(デヰル)を模したもので，念の為め，傍にちゃんとデヰルと仮名が振ってある。表は三四郎の宛名の下に，迷へる子と小さく書いた計である。三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟った。のみならず，端書の裏に，迷へる子を二匹書いて，其一匹を暗に自分に見立てゝ呉れたのを甚だ嬉しく思った。迷へる子のなかには，美禰子のみではない，自分ももとより這入ってゐたのである。それが美禰子の思はくであったと見える。美禰子の使った stray sheep(ストレイ シープ) の意味が是で漸く判然した。

この「ストレイ　シープ」ということばは，この作品のテーマに深い関連をもつものと思うが，それはともかくとして，三四郎は最初，この「ことばの意味」はわかったが，「このことばを使った女の意味」がよくわからなかった。そして，絵葉書をもらってから，「ことばを使った女の意味」がわかったのである。

同じく漱石の作品『虞美人草』から，もうひとつ引例を付け加えよう。

甲野さんが義妹の藤尾に家も財産もみんな呉れてしまったいきさつを説明するときの，甲野さんのせりふである。

「母の家(うち)を出て呉れるなと云ふのは，出て呉れと云ふ意味なんだ。財産を取れと云ふのは寄こせと云ふ意味なんだ。世話をして貰ひたいと云ふのは，世話になるのが厭だと云ふ意味なんだ。――だから僕は表向母の意志に忤って，内実は母の希望通にしてやるのさ。――見給へ，僕が家を出たあとは，母が僕がわるくって出た様に云ふから，世間もさう信じるから――僕は夫丈の犠牲を敢てして，母や妹の為めに計ってやるんだ」

また，次に引用するのは，藤尾の自殺によって悔悟した母に甲野さんが言うことばである。

「偽(うそ)の子だとか，本当の子だとか区別しなければ好いんです。平たく当り前にして下されば好いんです。遠慮なんぞなさらなければ好いんです。なんでもない事を六づかしく考へなければ好いんです」

甲野さんは句を切った。母は下を向いて答へない。或は理解出来ないからかと思

ふ。甲野さんは再び口を開いた。——

「あなたは藤尾に家も財産も遺りたかったのでせう。だから遺らうと私が云ふのに，いつ迄も私を疑って信用なさらないのが悪いんです。あなたは私が家に居るのを面白く思って御出(おいで)なかったでせう。だから私が家を出ると云ふのに，面当の為めだとか，何とか悪く考へるのが不可ないです。あなたは小野さんを藤尾の養子にしたかったんでせう。私が不承知を云ふだらうと思って，私を京都へ遊びに遣って，其留守中に小野と藤尾の関係を一日一日と深くして仕舞ったのでせう。さう云ふ策略が不可ないです。私を京都へ遊びにやるんでも私の病気を癒す為に遣ったんだと，私にも人にも仰しゃるでせう。さう云ふ嘘が悪いんです。——さう云ふ所さへ考へ直して下されば別に家を出る必要はないのです。何時迄も御世話をしても好いのです」

甲野さんのいうことが真実であるとすれば，母の甲野さんに対することばは，裏返しの表現やうそであり，また母は甲野さんのことばを誤解ないし曲解していることになる。

以上の引例における問題点をまとめていうと，「意味」には，「ことば自体のもつ一般的意味」と，「具体的な言語活動における言語の使用者の意味（表現者が意味しようとするもの，または受容者が理解しようとするもの）」とがあり，意味の本質は後者にあると考えるべきであるということである。

亀井孝氏は，

言語学自体は，うその問題を取りあげるにはおよばないであろうが，それが意味のことをとりあつかうかぎり，誤解のことは問題となるであろう。ここであえて逆説を述べることを許されるならば，≪ことばとは，誤解されるものである。≫そうだとすれば，≪意味の研究は，誤解の研究である。≫

と述べ，さらに，

あることばの意味とは，それがもちいられるときに決定される。その意味では，または，そのかぎりでは，ことばは，ことばとしては≪意味のないもの≫であって，その“使用”が≪“意味”になる≫のだとみなされる。このことを文脈ということばでかたるなら，すなわち，ここに文脈ということばをつかうことが許されるならば，意味とは，文脈によってしか決定されない。集団的慣用であるかぎり社会的に固定しているもの，と，われわれが素朴に考えているところの，その，いわゆる意味，それは，社会集団そのものが容認するところの，そのかぎりにおいて可能な，そういう文脈を背景の知識とする，いわばそのようなもろもろの文脈の切点である。

といっている。[注)1]

いま，「ことば自体のもつ一般的な意味」，亀井氏の「集団的慣用として社会的に固定している意味」を＜意義＞と呼び，「具体的な言語活動における使用者の意味」，亀井氏のいわゆる「文脈によって決定される意味」を狭義に＜意味＞と

呼ぶならば，<意義は文脈において意味をなす>ということができる。この場合，<文脈>とは，言語表現内部の筋道はもちろん，言語に表現はされないが，何らかの意味で関与する現物・現場・人間関係などもろもろの事物を含む事態の総体である。

さて，言語の理解行為の側から考えると，意味の理解は，<意義>と<文脈>とをよりどころとして行なわれる。ところで，表現者と理解者とのもつ<文脈>には個人差があり，[注)2] したがって表現者の<意味>と，理解者の受け取る<意味>とは必ずしも一致するとは限らない。そこに誤解が生ずるわけであり，亀井氏のいうように，≪意味の研究は誤解の研究≫になるのである。

しかし，言語は本質的に誤解の可能性をはらむとはいえ，いつでも誤解されるとは限らない。その可能性が実現するのは，文脈のあり方と，<意義>と<意味>との疎隔度とが掛け合わされた，さまざまの条件のちがいに応じてであると見なければならない。ある場合には，<意味>は9分9厘<意義>に依存し，ある場合には<意味>は9分9厘<意義>から疎隔する。極端な場合，<意義>に“向こうを向いて”もらったり，“半身に構えて”もらったりしないと，<意味>がつかめない，といった事態もありうる。『三四郎』や『虞美人草』の場合はこのような例である。

では，「極端な場合」とは，何であろうか。それは，ある<意味>を表現しようとするときに，常道的に採用されるべきことばの<意義>に依存せず，他のことばの<意義>を採用することによって“特殊の効果”をあげようとする場合のことである。

『三四郎』の美禰子は，自分と三四郎との心理的関係の“すがた”を，聖書の中の「ストレイ・シープ」ということばで象徴的に表わそうとしたし，『虞美人草』の母は，甲野さんに対して，<意義>を裏返しにして表現したり理解したりしたのである。

そして，美禰子と三四郎の場合，三四郎は最初，「ストレイ・シープ」の<意義>は理解したが<意味>はわからなかった。絵葉書をもらって初めて<意味>が理解できたのである。また，『虞美人草』の場合，母は甲野さんに対して<意義>の裏返しの<意味>を表現し，甲野さんは，その<意味>をちゃんととらえている。ところが母のほうは，甲野さんが<意義>に密着させた<意味>を表現しようとしたのに，それを裏返して<意味>を受け取っている，ということになる。

さて，『三四郎』『虞美人草』いずれも，個人対個人の間のことばのやりとり，いわゆるパースナル・コミュニケーションであるから，正解されるか誤解されるか，あるいは無理解に終わるかのどれかである。後に変わることはあっても，まず，どれかに決着し，次の事態へと進展する。それは，ふたりの“人間”とその特殊な“関係”がそうさせると考えてよいと思う。

ところが，これが，マス・コミュニケーションだったらどうだろう。マス・コミュニケーションで「極端な場合」があったとしたら，多数の理解者の中には，正解者が出たり，誤解者が出たり，あるいは曲解者が出たりするにちがいない。同じ＜意義＞をもつ同じことばに対して，どうしてそのような反応のちがいが生ずるのであろうか。

その実際について観察するために，わたしは「ユーモア」の理解の問題をとりあげてみた。

ユーモアとは，“知的な機知”や“意思的な風刺”と比較して，“情的な諧謔”とされている。ここでは厳密な定義をさしひかえ，“皮肉な，しかも上品で愉快な冗談”といった意味に使うこととする。たとえば，ある事がらに対する批判的な考えを述べようとする場合，正面切って理論的に反対意見を表明するのでなく，一応事態を超越した立場に立ち，寛容の精神に基づき，あたかも賛成であるかのごとき意見を開陳し，しかも極端に誇張することによって，〃ハハア実は反対なんだな〃と悟らせ，相手への効果を期待しようという言語表現である。

この問題について試みた小調査のあらましを，以下に述べることとする。

2　材料としたロベール・ギラン氏のユーモア

昭和37年3月27日，“富士山の頂上は国の所有か神社の所有か”という紛争についての名古屋地裁の公判が開かれ，国の敗訴となった。そして，その経緯は各新聞紙の社会面トップに報道された。[注)3] 当時の朝日新聞の記事を引用すると，次のとおりである。（昭37・3・27日付夕刊）

富士山頂の“国有”は不当

名古屋地裁で判決

神社側の言分通る

“譲与不許可の理由ない”

【名古屋】富士山頂八合目から上の土地所有権は国のものか，富士山本宮浅間神社

のものかをめぐる「国有境内地譲与申請不許可処分取消請求」の民事事件判決法廷は，二十七日午前九時半から名古屋地裁で木村裁判長，松田，篠原両裁判官係で開かれ，原告富士山本宮浅間神社の請求をほぼ認め，国の出した境内地譲与申請不許可処分を取消すとの判決があった。いわゆる「富士山頂争い裁判」として注目されていたこの問題も，三十二年二月の神社側提訴以来五年ぶりに一段階を画した。

富士山測候所敷地など除外

この日，定刻きっかり，分厚い判決書を小わきにかかえた木村裁判長ら三裁判官が入廷，着席後，判決書の読上げにはいった。昨年十一月結審後すぐ起草を始めたといわれるだけに両方の主張，証拠の認定，裁判所の判断などは的確にとらえられ，木村裁判長もよどみのない口調で強い自信をしのばせていた。

富士山の特殊性，公共性，それをはぐくむ強い国民感情などにささえられた国側の主張は神社側の出した二十八通もの書証や具体的事実に基づいた主張で全般的にくつがえされたが，長い判決文の中でこまかく裁判所側の判定がのべられていた。

判決主文は結局「富士山頂八合目以上の土地を譲与せよ」という浅間神社の申請に対し，国を代表する東海財務局が二十七年十二月に出した不許可処分を取消せという内容。ただし八合目以上のうち①厚生省富士山頂地区管理休憩舎敷地②気象庁富士山測候所敷地③電電公社御殿場電報電話局富士山頂分室敷地の三ヵ所，計約八百平方メートルは公益上，国に残すべきだとして，処分取消しの範囲から除かれている。この判決がもし確定すれば，大蔵省は，すでに浅間神社から出されている譲与申請を許可しなければならないわけ。

静岡県富士宮市の富士山本宮（ほんぐう）浅間神社，定光（さだみつ）権宮司の話　長年の宗教の現状から当然の判決だ。もともと国が戦後の国有境内地払下げのとき国有社寺等境内地処理中央審査会の答申を無視し，不法に一部譲与を強行したのが間違いのもとで，信仰の自由の点からも喜ばしい。

斎藤静岡県知事の話　富士山は何百年も前から神社の境内地だし，神社側のいい分に理があると思っていた。第一，戦後の国有境内地の払下げで富士山だけ例外にしたのもおかしいことで当然の判決だ。

大蔵省管財局三浦総務課長の話　富士山頂を私有地にすることは常識から考えても不自然であり，この判決は不満だ。控訴して争うかどうかは関係官庁とも相談して決めることになるが，もしこのまま判決をうけいれるとすれば，さきの不許可処分を取消し，あらためて判決にしたがって譲与の許可をすることになろう。

厚生省国立公園部中西管理課長の話　富士山頂の保護管理という面からみると，現在のまま国有地にしておく方がよい。富士山頂にケーブルカーを上げたいなど非公式な民間投資の希望が殺到しており，もし山頂が私有地になると国の管理がむずかしくなって富士山頂の景観を損うような事態が心配されるからだ。

天野山梨県知事の話　日本の象徴として富士山を朝な夕な仰いでいる山梨県民にとって割り切れない気持だ。またわが国最高の国際観光資源でもあるその山頂を一神社

の私有地にすることはおかしい。その地域をすべて国有地に編入して国で管理することを理想としていたのに——

ところで，同じ朝日新聞4月6日付の「きのうきょう」欄に，フランスのル・モンド紙の記者，ロベール・ギラン氏の『明日の富士』と題する一文が載った。全文を次に掲げる。

明日の富士

富士山の頂上は日本の国民にも，国家にも属さず，ある神社のもの，従って，私有財産だとの裁判所の判決が最近にあった。それを知った私は「そいつはいい」とひとりごちた。さては，そういうわけで，富士山の絶頂は，神々の時代から，ちっとも変らない，吹きざらしの退屈な場所だったのか。封建時代のまま取残されている。判事諸公の賢明な判決のおかげで，このふしだらもやがて始末がつき，富士山の山頂も，やっと，≪新しい日本≫に属することになろう。

◇

神主や僧は観光宣伝精神に富むことで有名である。。彼らは，やがて，富士山を近代化して，こま切れにして高く売りつけ，西武や東急のような観光会社を誘致できようし，すばらしい変貌（へんぼう）が起ることだろう。あの高みに超近代的な，鉄筋の神殿を建て，ぐるりは浅草の新世界のような，もっと立派な，アミューズメント・センターで取巻くのはどうだろう。私は夏のゴルフ場，動物園，噴火口のまわりにはモノレール，アメリカ人観光客のためのホテルなどできるのではないかと予想している。おそらく団地もいくらかあってよかろうし，映画館にいうまでもない。現在，頂上に，登山客用の女マッサージ師つきトルコブロひとつないのはもってのほかだ。それに，今にケーブル・カーで，疲れ知らずに登れるようになるものと，私は確信している。

◇

だが，私のほうは，はたして，登るかどうか怪しい。私はパリに帰る日を待ち，あちらには富士はないので，モンマルトルに登るとしよう。これは富士山にのぼるのと，ほぼ同じことじゃないでしょうか，どうです。

わたくしはこれを読んだ時，この皮肉な冗談を真に受ける人，つまり，ことばの<意義>の額面どおりに受け取る頭の固い人たちが，必ずいると思った。案の定，2週間後の4月20日付の同欄に，同じ筆者の次のような文章が出た。

ユーモアと涙

先日，私はこの欄に「明日の富士」のことを書いた。そして，ケーブルカーで登ると，頂上には，映画館やトルコブロがあるようになろうといった。何人かの読者がそれを憤慨して，私に手紙をよこした。私がそんな怪しからんことを是認し，要求さえしているように思いこんだのである。まったく，日本人のあるものにはユーモアの感覚がない。まるで見当ちがいをしている。私は是認したのではなくて，抗議をし，う

んざりしているのである。ただ茶化しながら抗議をしたのだ。あれはカリカチュアで，泣き笑いのユーモアなのだ。フランスの偉大な作家ボルテールは，当時のいろんな問題を批判するために，まっこうから笑いのめしていた。そして，いっている，「私は泣きだしたくなるのがこわくて，大急ぎで笑うのだ」と。

◇

日本人はその美しい国が損われて行くのを抗議もしないで放任している。まもなく，たとえば伊豆半島は，鉄道でひっかきまわされて，あのすさまじい熱海と同じになるだろう。先ごろ，私が訪れた紀伊の地方では，鉄筋六層のあきれはてた<観光塔>が潮ノ岬のすばらしい海岸の風光を台なしにしている。東京に近い高尾山には，ディズニーランドまがいのものが作られた。そのそばの相模湖のほとりは，悪趣味な，浅草の模倣となり，山の中で，拡声機がジャズをがなりたてている。東京では，芝の増上寺の周辺で，ふたつの古い門と美しい古い塀（へい）を取りこわしてしまい，ついには，何百年も経た古木を切り倒してしまった。なぜ？　ゴルフ場を作るために。

◇

これはまさに殺人である。私が時々，こうしたことを笑いのめそうとするのは，泣きたいのをごまかすためである。

なお，原文はフランス語で，この日本語訳は，フランス文学者井上勇氏の手になるものである。[注)4]

3　ユーモアの理解に関する実験的調査

前項に引用した『明日の富士』――<意義>と<意味>とのはなはだしい疎隔のあるこの文章――のユーモアが，どのように理解されたか，あるいは理解されなかったかを，実験的に調査しようとしたのであるが，日本の読者は，原筆者ギラン氏のフランス文を読むのでなく，井上勇氏の日本語訳を読むということが，用語の上でも，文脈の点からも，実は問題になる。しかも，失礼ながら井上訳は日本語としてあまりいい文章とはいえない。しかし，そのことは，いちおうたなあげすることとして調査を進めた。

調べようと思ったことは，大きな点だけあげると，次の3つである。

(1)　『明日の富士』のユーモアを理解できる人とできない人と，どちらが多いか。

(2)　正しく理解する人，また，誤って理解する人，どちらにしても，文章の中のどういうことばや表現からそのように理解するのだろうか。

(3)　正解・誤解は，何か人間的条件（知能・性格・趣味・性別といった種類のことがら）が関係するかどうか。

調査は，読解テストの形式で高校生を対象とし，準備テストと本テストの２回行なった。[注)5] 以下，本テストを中心として述べる。

まず，『明日の富士』の中の用語やことばづかいを変えた“書き換え文”を２つ作った。ひとつは，皮肉をよりたっぷりきかせ，多少えげつないことばづかいも含めて誇張したもの，もうひとつは，皮肉をやわらげてよりおとなしいことばづかいで当たり前の表現に近くしたもの，である。

書きかえ文を作ったのは，文章中の語の＜意義＞と，それに伴なって＜文脈＞とが変わることにより，理解のしかたにちがいが起こるのではないかと予想したためである。

三者を対照して次に掲げる。（以下，「原文」「誇張文」「やわらげ文」または略称㊟㊞㊛を用いて表わす。――は，顕著に変えた個所を示す。）

①㊟富士山の頂上は日本の国民にも，国家にも属さず，ある神社のもの，従
②㊞富士山の頂上は日本の国民にも，国家にも属さず，ある神社のもの，従
③㊛富士山の頂上は日本の国民にも，国家にも属さず，ある神社のもの，従

①って，私有財産だとの裁判所の判決が最近にあった。それを知った私は
②って，私有財産だとの裁判所の判決が最近にあった。それを知った私は
③って，私有財産だとの裁判所の判決が最近にあった。私はそれを知って思

①「そいつはいい」とひとりごちた。……さては，そういうわけで，富
②「そいつはいかす」と思わずひざをうった。さては，そういうわけで，富
③わず「よかった」とつぶやいた。……なるほど，そういうわけで，

①士山の絶頂は，神々の時代から，ちっとも変らない，吹きざらしの退屈な
②士山の絶頂は，神々の時代から，ちっとも変らない，吹きざらしの，何の
③富士山頂は，神代以来，少しも変らない，吹きざらしの退屈な場所だった

①場所だったのか。……封建時代のまま取残されている。…
②変哲もない，退屈な場所だったのか。封建時代のまま取残されている。…
③のか。……封建時代のまま取残されている。…

①判事諸公の賢明な判決のおかげで，このふしだらもやがて始末がつき，富
②それが，どうだ，判事諸公の賢明な判決のおかげで，この目にあまるふし
③判事諸氏の賢明な判決によって，このだらしのなさもやがて始末がつき，

①士山の山頂も，やっと，<新しい日本>に属することになろう。
②だらもやがて始末がつき，富士山の山頂も，やっと，<新しい日本>に属
③富士山の山頂も，やっと新しい日本に生まれかわるだろう。

①
②することになるでしょうな。
③

①神主や僧は観光宣伝精神に富むことで有名である。……彼ら
②神主や僧は観光宣伝精神に富む，金もうけの名人として有名である。彼ら
③近年，神社や寺院では観光施設を造ることに熱心である。……彼ら

①は，やがて，富士山を近代化して，こま切れにして高く売りつけ，西武や
②は，やがて，富士山を<近代化>して，こま切れにして，高く売りつけ，
③は，やがて富士山を近代化して，土地分譲をし，西武や東急のような観光

①東急のような観光会社を誘致できようし，すばらしい変貌（へんぼう）が
②西武や東急のような観光会社を誘致できようし，すばらしい変貌（へんぼ
③会社を誘致できようし，目ざましい変貌（へんぼう）が起ることだろう。

①起ることだろう。……あの高みに超近代的な，鉄筋の神殿を建て，ぐる
②う）が起ることだろう。あの高みに超近代的な，鉄筋の神殿を建て，ぐる
③……あの高みに超近代的な，鉄筋の神殿を建て，まわ

①りは浅草の新世界のような，もっと立派な，アミューズメント・センター
②りは<浅草の新世界>のような，もっと立派な，アミューズメント・セン
②りは浅草の新世界のような，もっと立派な，アミューズメント・センター

①で取巻くのはどうだろう。……　私は夏のゴルフ場，　動物
②ターで取巻く，てなことにしてはどうだろう。　私は夏のゴルフ場，　動物
③で取巻くのもよかろう。……　私は夏のゴルフ場，　動物

①園，噴火口のまわりにはモノレール，アメリカ人観光客のためのホテルな
②園，噴火口のまわりにはモノレール，アメリカ人観光客のためのホテルな
③園，噴火口のまわりにはモノレール，アメリカ人観光客のためのホテルな

①どできるのではないかと予想している。……おそら
②どできて，わんさと人がおしかけるのではないかと予想している。団地も
③どできるのではないかと予想している。……おそら

①く団地もいくらかあってよかろうし，映画館はいうまでもない。現在，頂
②いくつかあってよかろうし，映画館はいうまでもない。……現在，頂
③く団地もいくらかあってよかろうし，映画館はいうまでもない。現在，頂

①上に，登山客用の女マッサージ師つきトルコブロひとつないのはもっての
②上に，登山客用の女マッサージ師つきトルコブロひとつないのはもっての
③上に，登山客用の女マッサージ師つきトルコブロひとつないのは感心でき

①ほかだ。それに，今にケーブル・カーで，疲れ知らずに登れるようになる
②ほかだ。それに，今にケーブル・カーで，疲れ知らずに汗一滴流さず登れ
③ない。…それに，今にケーブル・カーで，疲れ知らずに登れるようになる

①ものと，私は確信している。
②るようになるものと，私は確信している。
③ものと，私は期待している。

①だが，私のほうは，はたして，登るかどうか怪しい。……私はパリに帰
②だが，私のほうは，はたして，登るかどうか怪しいもんだ。私はパリに帰
③だが，私自身は，はたして，登るかどうかわからない。……私はパリに帰

①る日を待ち，あちらには富士はないので，モンマルトルに登るとしよう。
②る日を待ち，あちらには富士はないので，“モンマルトル”に登るとしよ
②る日を待ち，あちらには富士はないので，モンマルトルに登ろうと思う。

①……これは富士山にのぼるのと，ほぼ同じことじゃないでしようか，どう
②う。これは富士山にのぼるのと，ほぼ同じことじゃないでしようか，どう
③……これは富士山にのぼるのと，ほぼ同じことではないだろうか。

①です。
②です。

テストの方法は，次のとおりである。

まず，富士山頂裁判に関する新聞記事の抜粋を配布して，予備知識を与えるとともに，この名古屋地裁の判決（浅間神社に富士山頂を払い下げよ）に対する生徒自身の賛否を問う設問を課した。これを10分で回収した。

次に，『明日の富士』の原文・誇張文・やわらげ文のどれかがわたるようにランダムに，つまり，各文章が，生徒の 1/3 ずつに当たるように問題文を配布し，次の設問を課した。

【問 1】 この文章の筆者は，富士山が私有財産であるという判決に，賛意を表しているのか，いないのか，次の正しいと思うものの番号に○をつけよ。

1　賛意を表している

2　賛意を表していない

3　賛意を表しているようでもあり，いないようでもある

4　わからない

【問 2】　そう判断した理由・根拠を次に記せ。(本文の中の語句を引用し，それにもとづいて説明すること)

これを10分で回収してから，『ユーモアと涙』の文章を配布し，次の設問を課した。

○　先の文章『明日の富士』は，フランスの新聞記者ロベール・ギラン氏が朝日新聞の「きのうきょう」欄に寄稿したものである。あとの文章『ユーモアと涙』は，同氏が2週間後に同じ欄に再度寄稿したものである。筆者はあとの文章で，先の文章は実は裏返しの表現である，ということを説明している。

【問 3】　右のことを理解した上で，再び『明日の富士』を読んでみて，筆者が判決に賛意を表していない，ということがわかる部分を指摘せよ。

【問 4】　あとの文章で，筆者は「茶化す」とか「笑いのめす」とか言っているが，前の文章の中で，「茶化した表現」「笑いのめそうとした表現」と思われる部分を指摘せよ。

この答案は，15分で回収した。

以下に，結果のあらましを述べる。

◇　正答・誤答の傾向

〔問1〕に対する答は次のとおりである。まず，全体として見ると，

2	賛意を表していない（＝正答）	56 (27.2%)
1	賛意を表している（＝誤答）	117 (56.8%)
3	賛意を表しているようでもあり，いないようでもある（＝どちらともとれる）	30 (14.6%)
4	わからない	3 (1.5%)

正答者は誤答者の半数にも満たない。[注)6] つまり，ギラン氏のユーモアを解した人は，27%強にすぎなかったのであるが，それでは，原文・誇張文・やわらげ文の文章別ではどうだろうか。第1表を見ていただきたい。

原文と誇張文はよく似ているが，㊟のほうが正答が多い。やわらげ文では，“どちらともとれる”は他の二者とほとんど変わりないが，正答がぐんと減り，誤答がぐんとふえている。つまり，あのような用語やことばづかいに変えると，文脈上皮肉がきいたり，逆にきかなくなったりする傾向が見られるということになる。少し飛躍していえば，ある＜意味＞を表わすには，それに適した＜意義＞

をもつ語と適さない<意義>をもつ語とがある，ということになろうか。

第 1 表	原　文	誇張文	やわらげ文	
正　答	22(31.9)%	24(34.8)	10(14.7)	56
誤　答	35(50.8)	34(49.3)	48(70.6)	117
どちらともとれる	11(15.9)	10(14.5)	9(13.2)	30
わからない	1(1.4)	1(1.4)	1(1.5)	3
計	69(100.0)	69(100.0)	68(100.0)	206

・%は，それぞれの文章を読んだ人数に対するもの。

◇　どんなことばや表現から解釈したか

それでは，正答にしても誤答にしても，生徒の判定の根拠となった個所は，文

第 2 表
（数値は解答者数．以下同じ．）

		そいつはいい	吹きざらし	賢明な判決	ふしだら	<新しい日本>	観光宣伝精神	近代化	こま切れ	観光会社誘致	すばらしい変貌	浅草の新世界	アメリカ人観光客	トルコブロ	疲れ知らず	登るかどうか	モンマルトル	〔説明つき〕	（総人数）
正答者	原　文	1	0	1	1	1	5	2	3	2	3	0	0	1	0	9	15	13	22
	誇張文	0	1	0	0	5	3	2	3	1	2	0	1	1	1	2	10	16	24
	やわらげ文	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	5	4	10
	計	2	1	1	2	6	8	4	6	3	6	0	1	2	1	15	30	33	56
誤答者	原　文	21	3	8	8	15	6	7	2	3	4	2	3	2	2	0	2	0	35
	誇張文	26	7	7	4	10	3	5	0	2	0	1	1	2	1	0	1	3	34
	やわらげ文	31	8	6	5	13	4	5	0	0	3	1	0	0	2	0	3	0	48
	計	78	18	21	17	38	13	17	2	5	7	4	4	4	5	0	6	3	117
どちらともとれる	原　文	10	1	1	1	1	2	1	0	0	0	1	1	0	1	4	4	4	12
	誇張文	8	0	0	1	2	2	2	2	2	1	0	0	0	1	2	4	3	11
	やわらげ文	6	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	1	10
	計	24	2	1	2	5	4	3	2	2	1	1	1	0	2	12	10	8	33
わからない																			

・どの部分かは，原の中のことばで示す。誇やのそれに当たる部分は，前掲の対照表で見ていただきたい。
・それぞれのことばは，そのことばを含む前後の文を代表するものである。たとえば「そいつはいい」は，誇では「『そいつはいかす』と思わずひざをうった」であり，やでは「思わず『よかった』とつぶやいた」である。
・数値はすべて実数。ひとりで何個所も指摘したものがあるから，指摘個所の合計と人数は一致しない。第3・4表も同様。

章の中のどの部分であろうか。

第2表は，〔問2〕の答を分類集計したものである。〔説明つき〕というのは，たとえば，

「富士山は神々の時代から……のまま取残されている」というのは「ふしだら」だと言っているが本当はその反対を言っているのである。そして「神主や僧は……確信している」と書いてあるのは皮肉っているのである。

という答のように，「反対」とか「皮肉」とかのことばで，はっきりユーモアであることを指摘したものを表わす。誤答者のや，“どちらともとれる”の中にも〔説明つき〕があるが，それらはたとえば，

「観光宣伝精神に富む，金もうけの名人」というところはひにくが入っているようだが，この文の終りの部分からみて賛成しているようだ。（誤答者）

とか，

「そいつはいかす」という言葉は云うまでもなく賛意であるが，最後の方では富士山というものが悪い意味での<近代化>していく様子を想像してあざわらっているような所もある。（“どちらともいえない”の答）

のように，皮肉・ユーモアの要素を認めつつ正答しえなかったものである。

この第2表に顕著に見受けられることは，次のとおりである。

1. 正答者を全体としてみると，概して，「私は登るかどうか怪しい」と「モンマルトルに登るとしよう」つまり，最後の段落を根拠とする傾きが強い。
2. 誤答者を全体としてみると，「そいつはいい」から「近代化」のあたりまで，つまり，文章の前半の叙述を額面通りに受け取ってそれを根拠とする傾きが強い。
3. 「どちらともとれる・わからない」組を全体としてみると，最初の「そいつはいい」と最後の「登るかどうか」「モンマルトルに登る」とが比較的多い。つまり，前半と末尾段落との食いちがいに迷っているわけである。
4. 文章別に比べてみると，まず正答者では，「<新しい日本>」から「すばらしい変貌」までが，㊟㊝の二者では数名あるのに，㊥では0ないし1である。㊥では，「<新しい日本>」の<>印をはずし，「観光宣伝精神」を「観光施設を造ることに熱心」と変え，「こま切れ」を「土地分譲」とし，「すばらしい」を「目ざましい」としたため，このあたりの皮肉味がぐっと減少したことが，この数値に表われているように思われる。㊟と㊝の間の顕著なちがいとしては，㊝で「登るかどうか」「モンマルトル」が少ないかわりに〔説明つき〕が多くなっている。これは，誇張して書きかえたため，全体と

して皮肉味がたっぷり出て，それにより全体的にユーモアを感じたものと察しられる。また，「<新しい日本>」が多いが，5人のうち4人までが，「新しい日本に属することになるでしょうな。」のアンダーラインの部分を指摘して，皮肉に聞こえるといっているのである。

5. 誤答者では，文章による顕著なちがいは見られない。しかし，1人あたり平均指摘個所数は，㊟2.5，㊟2.2，㊟1.7で，㊟が最も少ない。

6. 「どちらともとれる・わからない」組でも総体に㊟で指摘個所が少ない傾向が見られる。

以上要するに，

○正答者は最後の部分，誤答者は前半の部分を根拠として筆者の意図を解釈し，その両方の部分に目をつけた人はその重さのちがいをはかりかねた。

○書き換えによって，誇張の方向へも，やわらげの方向へも，ある程度の効果はあったと判定できる。

の2つのことが知られる。

さて，次に，〔問 3〕と〔問 4〕との答を分類集計してみよう。第3表は，〔問1〕の解答別に，かつ〔問2〕の答とも比較して，見ることができるようにしたものであり，第4表は，〔問1〕の解答のいかんにかかわらず，㊟㊟㊟の文章別に一括して見ることができるようにしたものである。

第3表によって，〔問2・3・4〕の比較を試みてみよう。

第 3 表

		そいつはいい	吹きざらし	賢明な判決	ふしだら	<新しい日本>	観光宣伝精神	近代化	こま切れ	観光会社誘致	すばらしい変貌	浅草の新世界	アメリカ人観光客	トルコブロ	疲れ知らず	登るかどうか	モンマルトル	〔説明つき〕	総人数
正答者	問 2	2	1	1	2	6	8	4	6	3	6	0	1	2	1	15	30	33	56
	問 3	1	4	8	6	10	12	13	11	9	11	2	0	1	2	25	35	3	
	問 4	20	7	23	18	21	13	8	9	6	14	20	15	26	11	3	16	1	
誤答者	問 2	78	18	21	17	38	13	17	2	5	7	4	4	4	5	0	6	3	117
	問 3	0	16	5	4	6	11	7	9	5	3	3	4	0	1	37	60	4	
	問 4	17	11	26	11	26	23	16	19	11	15	21	25	40	21	1	14	1	
どちらともとれる・わからない	問 2	24	2	1	2	5	4	3	2	2	1	1	1	0	2	12	10	8	33
	問 3	1	5	2	3	4	3	5	5	4	3	3	2	2	0	10	11	0	
	問 4	7	3	7	7	7	7	7	8	5	7	5	7	10	7	3	8	0	

1.　正答者は，『ユーモアと涙』で正答の自信を深めた結果，〔問2〕に比して，〔問3〕でも，〔問4〕でも，指摘個所が総体にふえている。〔問3〕では，ギラン氏が判決に不賛成である旨を判断する根拠とした個所を指摘させたのであるが，「登るかどうか」「モンマルトル」の部分の指摘が多く，ついで「観光宣伝精神」「近代化」「こま切れ」「観光会社誘致」のあたりがやや多く指摘された。また，〔問4〕では“裏返し”や“笑いのめし”の表現と見られる個所を指摘させたのだが，「そいつはいい」から「観光宣伝精神」までと「すばらしい変貌」から「疲れ知らず」まで，ほぼ全般にわたって指摘個所が多い。とくに「トルコブロ」「賢明な判決」「新しい日本」などの指摘が多い。

2.　誤答者は，〔問3〕で「そいつはいい」が0になり，「＜新しい日本＞」「賢明な判決」「ふしだら」などが激減し，「登るかどうか」「モンマルトル」が激増しているが，これは当然の反応である。〔問4〕では正答者同様「トルコブロ」「賢明な判決」「＜新しい日本＞」などが多い。

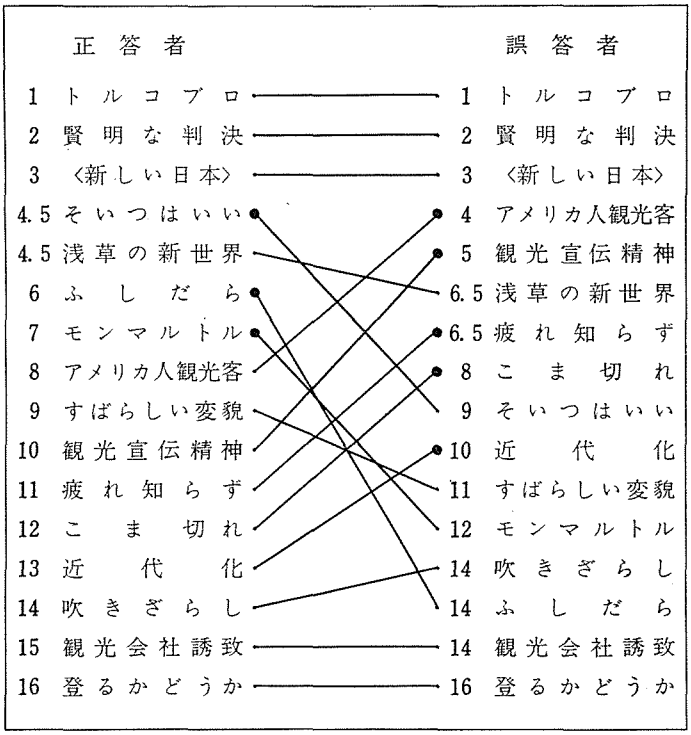
3.　正答者と誤答者の間には，注意すべきちがいがある。すなわち，〔問4〕の各指摘個所を，多い方から正答者誤答者それぞれに順位づけて，対照すると，第1図のようになる。前述のごとく，上位3者は共通であり，また，下位2者も共通である。いま，順位3以上の差のあるものを取り出すと，正答者のほうが高いものは，●印の「そいつはいい」「ふしだら」「モンマルトル」で，これらは第1段落と第3段落に含まれる。誤答者では「アメリカ人観光客」「観光宣伝精神」「疲れ知らず」「こま切れ」「近代化」などで，これらは

第4表

		そいつはいい	吹きざらし	賢明な判決	ふしだら	＜新しい日本＞	観光宣伝精神	近代化	こま切れ	観光会社誘致	すばらしい変貌	浅草の新世界	アメリカ人観光客	トルコブロ	疲れ知らず	登るかどうか	モンマルトル	指摘個所延べ数	総人数	指摘個所平均
問3	原文	0	7	7	5	6	8	9	10	6	7	3	2	2	1	25	38	136	69	2.0
	誇張文	2	11	6	5	11	14	12	13	10	8	2	2	1	2	17	37	153	69	2.2
	やわらげ文	0	7	2	3	3	4	4	2	2	2	3	2	0	0	30	31	95	68	1.4
	計	2	25	15	13	20	26	25	25	18	17	8	6	3	3	72	106	384	206	1.9
問4	原文	16	4	20	17	22	12	13	15	9	20	13	18	24	8	1	17	229	69	3.4
	誇張文	16	7	19	9	18	23	11	14	7	8	16	14	22	12	5	17	218	69	3.2
	やわらげ文	12	10	17	10	16	8	7	7	6	8	17	15	30	19	1	4	187	68	2.8
	計	44	21	56	36	56	43	31	36	22	36	46	47	76	39	7	38	634	206	3.1

第2段落に含まれる。つまり，誤答者にとっては，第1段落は誤答の原因となったもの，第3段落は〔問3〕の答の根拠としたものであるため，第2段落に集中したものと見られる。最初からの正答者は，誤答者が〔問3〕の答の根拠としたものを，むしろ「皮肉」と取っているわけである。

第 1 図



第4表では，まずやわらげ文において，〔問3〕でも〔問4〕でも指摘個所が総体に少ない。また，個別的に見ると，㊀㊁より多いのは，〔問3〕で「登るかどうか」，〔問4〕で「吹きざらし」「浅草の新世界」「トルコブロ」「疲れ知らず」である。誇張文では〔問3〕で全般に多く，個所としては，〔問3〕で「吹きざらし」「<新しい日本>」「観光宣伝精神」「近代化」「こま切れ」「観光会社誘致」「すばらしい変貌」，〔問4〕で「観光宣伝精神」「登るかどうか」などである。これらは，やはり誇張的書きかえの効果を示すものと解釈できる。

◇　正解・誤解に人間的条件が関係するか

〔問2〕の答を学年別・性別に比較すると，第5表のようになる。

この表から次のことがわかる。

第 5 表		正　答	誤　答	どちらともとれる わからない	計
学年別	1年生	23	62	19	104
	2年生	33	55	14	102
性別	男	31	63	11	105
	女	25	54	22	101
					206

1. 2年生のほうが正答が多く，1年生のほうが誤答が多い。しかし，これは知能というよりも，読書経験や生活経験，いわば年の功による考え方の弾力性の発達によるものと思われる。というのは，準備テストで，知能指数や学校の成績との関係を調べたのだが，著しい相関は見られなかったし，同じ準備テストで，読書傾向や新聞への接近度を調べたら，やはり顕著な相関は見られず，ただ，外国のものを読むことを好む生徒に多少正答者が多い傾向があると判断されたにとどまるのである。（データは省略）ちなみに，2・3年生を対象とした準備テストでは，正答者は41.6%であった。（注6参照）
2. 男のほうが答がはっきりしており，女のほうが慎重で，答を出すのに用心深いと見られる。

次に，名古屋地裁の判決に対する賛否の意見（ものの考え方の一面を示すと見られる）と関係がないかを見てみよう。つまり，賛否の意見により，読み方がちがうかどうかという問題である。

第6表に見られる限りでは，相関はない。

第 6 表		正　答	誤　答	どちらともとれる わからない
判決に対して	賛　成	5%	11	3
	反　対	17	32	7
	どちらともいえない わからない	5	15	5

ただ，正答者にも，皮肉に反発する人とユーモアに共感する人との別はあるだろう。この調査では何ともいえないが，テスト後，生徒たちと話し合って感想を求めたところから判断すれば，ギラン氏のユーモアを解するためには，真正面から憤慨するのでなく，一歩退いて第三者的な目で人間社会の矛盾や弱点を見つめ，静かに慨嘆する，ゆとりのある反発心・批判精神というものをまず身につけることが必要であろうと思われる。それは，しかし，言語以前の問題である。

3　む　す　び

言い残した点を次に，二，三書きつけておきたい。

1. 調査では，ロベール・ギラン氏の文章であることがかくされていたため，誤読が多かったのかもしれない。最初からフランス人の文章だと明記されていたら，皮肉やユーモアに気づいた人がもっと多かったかもしれない。これは，文章の外の文脈という問題になる。
2. 楽な気持ちで新聞を読むのと，緊張してテストを受けるのとの条件のちがいも考慮する必要があるかもしれない。
3. 年代の相違も考慮に値いする。生徒の中には，自分が神主だったら，富士山頂を大いに開発して，大ドリームランドを作る，と放言したものもいた。
4. 「モンマルトルに登る」ということの意味をどのように理解したかが，正答・誤答に関係をもつとも考えられる。

三尾砂氏は，

> 話の場における文脈は，話の場からぬき出して言葉だけにしてしまうと，文脈としての自律性をかならずしも持つものとは言えなくなる。これに反して書かれた文章は言葉の中だけで文脈を持つ。その文脈は他に依存しないもので，自律性を持つものである。

といっている。注)7 逆にいえば，話しことばでは，ことば以外の現場の事物や行動などが文脈を補うが，書きことばではそういう補いをする事物がないわけである。

三四郎と美禰子，藤尾の母と甲野さんの場合は，話しことばだから，いろいろな事情が総合されて文脈を形成する。しかし，『明日の富士』は書きことばだから，書かれた文章にしか文脈はない。しかもその用語や言いまわしは＜意義＞と＜意味＞とが著しく疎隔している。

文脈の問題として考えると，筆者ギラン氏の主観内の文脈が『明日の富士』の文章の文脈にどの程度的確に投影されているか，さらに，多くの読者の主観内に形成された文脈は『明日の富士』の文脈をどう反映したか，という問題になる。

それにしても，同じ文章や語が，全く反対の＜意味＞に受けとられるということは，正に＜意味の恣意性＞を表わすものである。しかし，皮肉やユーモアをきかせるためには，よりふさわしい用語や言いまわしがあるはずであり，それを選ぶことが有利であるのは，いうまでもないことである。

注) 1：「意味のはなし」(『言語研究』第40号—昭和36年9月—)

2：この問題についてのわたしの考えは，「場面とことば」(『講座現代国語学』I—昭和32年11月—) に詳しく述べた。そして，客観的な＜文脈＞と，主観的な＜脈絡＞とを概

念として区別した。しかし，そのような名称は必ずしも一般的でないので，ここでは主観的なものも客観的なものも，ともに＜文脈＞という用語で表わしておく。

3：　たとえば，毎日新聞では，その報道の2日後，29日付紙面に「トピック」として取りあげ，長文の解説記事を“富士山頂略図”入りで掲載した。かなりにニュース・バリューのある話題であったことがわかる。

4：　井上勇「ギランと私」(朝日新聞，昭和37年6月21日付学芸欄）による。井上氏はその中で次のように書いている。「ギラン君が私を訳者に選んだのは，たがいに気ごころがよくわかっていて，彼がいいたい言外の気持が，私にはわかると思ったためだろう。彼の文章はすなおで，だれにでもよくわかり，特定の訳者を必要としないが，言葉に現われていない，彼の気持は，だれでもわかるとはかぎらず，長い友情によってのみ理解できる。」

5：　○準備テスト……昭和37年4月26日(木)，東京都立井草高校，2・3年生，計101名（男51，女50）

○本テスト……昭和37年5月29日(火)，同上校，1・2年生，計 206名（男105，女101）

6：　準備テストでは，101名中，正答42名，誤答48名であった。ただし，書きかえは行なわず，全員が原文であった。

7：　『国語法文章論』(昭和23年2月)

（付記）この研究は，昭和37年度に言語効果研究室で行なった「マスコミュニケーションにおける表現の効果と理解のしやすさに関する研究」の1部である。集計整理には研究補助員の宮地美保子さん・屋久茂子さんの助力を得た。また，テストに関して，井草高校教諭（当時）小田島哲哉氏に大変お世話になった。記して謝意を表する。